宇野千代全集 第七卷

宇野千代全集

第七卷

宇野千代全集　第七巻

昭和五十三年一月十日印刷
昭和五十三年一月二十日発行

著者　宇野千代
発行者　高梨茂
印刷者　山元正宜
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話〇三（五六一）五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七八

小説　七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

或る一人の女の話　5
いま見るとき　147
故郷の家　203
八重山の雪　223
あとがき　283
書誌　284

或る一人の女の話

1

一枝の生れた家は、それほど大きな家ではない。仏間と座敷と店の間と、奥の納戸と時計の間と、それに玄関と庭を通って、台所と向う座敷とがあった。その田舎の町では、それでも、案外、大きな家と思われていたのかも知れない。家のぐるりは九尺の黒板塀で囲み、店の間には紅殻格子がはまっていた。なぜ、店の間と言ったのか分らない。一枝の家では、この店の間で、ものを売ったりしたことはないが、そう呼ぶのが、この地方の習慣なのかも知れない。庭と言うのも、この地方の言葉で、ほんとうの庭ではない。玄関から家の裏手へ抜ける通路のことで、一枝の家でも、玄関の土間の横手の扉をあけて、台所を通り、向う座敷の前を抜けて、泉水のある庭へ出る、仄暗い通路であった。そこから、風呂場と井戸は別棟の中にあって、雨の降る日は、水汲みに行くのに、軒端づたいに行った。井戸端から、馬ん駄屋と呼ばれる馬小屋の屋根が見える。そ

の向うに、蜜柑畑と竹藪が続いていた。

いまから七十何年か前に、一枝はこの家に生れた。一枝はしかし、自分を生んだ母の顔をまるで知らない。娘の頃になって、一枝が町を歩いていると、町の女たちが寄って来て、「やれ、一枝さまの、お母に生写しにおなりんされたことよのう、」とよく言ったから、たぶん、自分と似た顔をした女だったろうと思う。どういう訳か一枚の写真もない。一枝はしかし、この母を一度も懐しいと思ったことはない。また、母に早く死なれたことを、不仕合せだと思ったこともない。あんまり早く死に別れたので、母に対して、何の記憶もなかったからかも知れない。家の中に、これは母の使ったものだとか、これは母の着たものだとか言うものもなかった。ただ、仏壇の中に、母の戒名と俗名を記した位牌があるだけだった。一枝が大きくなってから、こんな話を聞かせたものがある。母が死ぬときに、一枝はやっと歩ける、と言う頃だった。赤い提灯に灯をつけたのを持って、母の寝ている蒲団のぐるりを、よちよちと歩いていた。「この子のことが気にかかってのう、」と言って、母が泣いたと言うのである。この話は少女小説のように聞える。しかし、一枝はその幼かった自分のことを聞いても、悲しくはならない。この母の言葉をそのまま信じても、悲しくはならない。一枝の中で、母の姿は抽象体になっていて、生身の母とは思えないからである。

これは、だが、ついこの間、一枝が七十をとうに越したときのことである。或るとき、ものを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

考えていて、自分のこの生身が、この世に生れ出た不思議さに考えついたとき、ふいに、この姿も思い浮ばない、若かった母に感謝する気になったことがあった。よく、この私を生んでくれた、と思い、何と言うのか、胸に湯のようなあたたかいものの流れるのを感じたものである。

一枝の一番最初の記憶は何であろうか。それはやっと一枝が歩けるようになってからのことか。座敷から見ると、ほんの三寸くらい、店の間の畳が低くなっている。一枝は座敷の柱に掴まって、じっと店の間の畳を見る。そして、片足をそっとずらして低い方へ下す。やがて、全身の重心を移して、もう片方の足も下す。下りられた。あの微かな危惧のまじった歓喜の気持を、一枝は忘れない。いまから七八年前のことであるが一枝は腰の骨を折って手術したことがある。腰にギプスをはめて、不動の姿勢で、七ヶ月の間、仰臥していた。やっと骨がくっついてからのことである。両脇を杖で支えて、畳の上を歩く訓練をしたが、七ヶ月の間、仰臥したままで歩かなかったので、歩くとはどう言う風にするものなのか、その、足を互い違いに進める動作が、どうしても思い出せない。いや、思い出せないのではない。分らなくなったのである。「右足です。」と補導の人が言う。「今度は左足です。」とまた言う。言われるたびに、一枝はゆっくりとその足を出した。あ、これはあの、幼い子供のとき、店の間の畳の上へ下りて行くときの、あの狐疑逡巡の気持と同じではなかったか。この思いが、稚い子供の頃につながる。

母が死んでから後、一枝はしばらくの間、高森にある父の生家へ預けられたと言う。高森の家

は、一枝の家から四里ほど奥にある。奥と言うのは、町ではない、山奥と言う意味かと思うが、もの心ついてからも、一枝はたびたび、この高森の家へ行った。四里の山道を車で行ったこともあり、馬の背に乗って行ったこともあり、歩いて行ったこともある。峠の茶屋で休んだりして、だんだん山深く登って行くのだけれど、高森まで行くと、俄かに広い往還に出る。広い往還の中に、小さな流れがあって、その両岸に柳の並木があり、道は並木のそとで二つに分れて、ちょっとした町の家が、両方の道を挾んで並んでいる。父の生家は、その町並の中ほどにあった。

一枝はいまでも、その高森の広い往還を思い出すたびに、なぜ、あの山奥に、ふいにあんなに美しい町並があったのか、不思議に思う。父の生家があったために、そこのほんの一町ほどの町並が、そう言う形になっていたのかも知れない、と思うのは、その家を特別のものと思う一枝の錯覚か。父の生家は、父祖代々の造り酒屋であった。太い格子の這入った白壁が、どこまでも続いている。店の軒には「吉野酒蔵」と彫った部厚い看板がかけてあって、その下に、大きな、提灯のような蜂の巣があった。

店さきには夥しい数の酒樽が積んであった。その前に檜の厚い板があり、大小の桝がかけてある。酒を買いに来る人たちの、小腰を屈めて這入って来るのに対して、「売ってやるぞよ、」とでも言うような、一種横柄な態度で、番頭が酒をはかってやる。その主客転倒の風景が、家の格式を語っているのか。店の奥の一段高くなった畳の上に、父の兄、一枝の伯父が坐っていた。伯父

は生れながらの足なえであった。夏も冬も炬燵をおいて坐っていたが、叱咤するのではない、一種、力のある声で、店の采配を振っていた。

一枝はこの家の中で稚い頃を過したと言う。と言うのは、一枝の中に、ここで過したと言う記憶がまるでないので、半年くらいいたのか、それとも三年くらいもいたのか、いまになると分らない。ただ、その家で暮していた間に、父の生家が、何か特別の家であって、この家と繋がりのある自分まで、ただの小さな女の子ではなく、「吉野の姪」であると思い込んだものかと思う。

2

この一枝の思い込み方は、一種特別なものである。父の生家が、近在に聞えた素封家であったとしても、何のことがあろう。ただ、いまから七十四五年も昔には、凡ゆる人々が疑いもなくそう思い込んでいて、父の生家だけではなく、その分家の戸主である父をまで、特別のものとして遇していた。一枝はその中で育った。

高森にいる間のことで、ただ一つの話を聞かされたことがある。一枝は体の弱い子であった。便が何日も出なかった。「いつでも、楊子のさきで、せせって出したんぜよ。」と伯母が笑って話した。この伯母は噂に高い美しい人であった。足なえの伯父の妻であることを、誰も不思議には

思わない。一枝はこの伯母の、世にも美しい笑顔を忘れることがない。一枝は娘になるまでの間、幾たび高森の家へ行ったか分らないが、そのいつのときにも、この伯母の笑顔よりほかの顔を見たことはなかったから。

高森から帰ると、家には新しい母が来ていた。いや、新しい母などと、一枝に思われたろうか。一枝の記憶には、前の母とか新しい母とかの区別がない。自分の生母が死んでいるのが分らない。新しい母はこの家の中にずっといたようにしか思われない。「お母(かか)、」と呼んでいた。あとで年齢を数えると、母は十七のときに、父の後妻に来たことになる。一枝が四つのときに、弟の悟が生れた。七つのときに次ぎの弟の直が生れ、九つのときに妹のとも子が生れた。それから、十一のときに吉雄が、十四のときに秀雄が生れたのであるが、それらの弟妹たちに対して母のとった態度と、一枝に対してとは、明らかに、或る違いがあった。「姉さまがお食べてから、」「姉さまがお這入りてから、」「姉さまがお出でてから、」といつでも言った。姉さまとは一枝のことで、何ごとも、一枝をさきにするのであったが、このことに一枝が気附いたのは、いつ頃のことであろう。この母は自分の生母ではない、と気附いたとしても、しかし、それが一枝にとって、何であろう。生母とは一体どう言うものか、一枝は知らないからである。しかし、そのことは、ほんの僅かでも、一枝を不仕合せにしただろうか。極く自然に、一枝は自分の家族の間での自分の配置を悟っていた。そして、極く自然に、その間で身を処していた。いや、処していたのではない。それが

自分の置かれた位置だと言うことを、何の苦慮もなく信じていたのである。そして、このままの母を愛したのであった。

それについて、一枝はよく母から聞かされた話がある。母は十七で父の後妻になった。この母がただの若い娘であったのと反対に、父はその半生を放蕩無頼に過した四十男だった。二人の間では、ことごとに生活の明暗が違っていた。母は泣くことがあった。或る夜更けに、最早やここにはいられない、と思い、その生家へ逃げ帰ったことがあった。母の生家は、父の家からほんの一里へだてた川下と言う村にあった。ほんの一里しか離れていないところにいて、父がどんな男か知らなかったのであろうか。知っているのはただ、父があの、高森の吉野と言う素封家の次男であると言うことだけだったろうか。しかし、いまから七十何年も昔の田舎では、そんなことは珍しいことではなかった。「お母、お母、」と呼んで、いなくなった母の姿を追うので、女中の一人がもてあまして、川下の家まで一枝を背負って行ったと言う。一枝の眼に、母を追うて泣いた自分の姿が見える。川下の家は竹藪の続いた堤の下にある。いまでも、竹藪のざわざわと鳴る音が聞える。一枝はこの竹藪のそばで泣いたのだと言う。「あのとき、一枝さんがわしを追うてお出でざったら、この家には戻らざったかも知れん。」母はそう言う。弟の悟が生れたのはその後だ。

しかし、母はその一枝を恨んでいるのではなかった。そのあとで、多くの弟妹たちを生んだ母

は、ただ、自分のこの運命の組合せを、言葉にして見ただけのことであった。母はその愉しいとは言えなかった生涯を充分に耐え、或いは甘受したかのように見えたから。この母と一枝とは、真の母と子ではないままに、互いに愛していたと思われていたからだ。

父について、一枝はどんな記憶を持っていたか。一枝のもの心ついてからの記憶では、まず、こととと馬の足を打ちつける音を、夜となく昼となく聞いたと思うのに、家の裏にある馬ん駄屋の藁屋根は崩れ落ちそうになっていて、その中に馬のいたと言う記憶がない。しかし、父は馬を何頭も飼っていたと言う。店の間の奥の、暗い納戸の押入の中で、或るとき一枝は、夥しい数の競馬の目録を見たことがある。宛名はどれも、父になっていた。自分の馬を父は競馬に出していたのか。では、どうしてそれをやめたのか。不思議なことであるが、この家では、父についてものを問うたりする習慣はなかった。一枝の記憶では、父のことを、母にさえ訊いたことがなかった。父について、何か知ろうなどと思ったことがあったか。それは、雨か雪か、明日の天気のことを人に訊かない農夫の心に似ていたか。

一枝の記憶の中の父は、いつでも、時計の間に坐っていた。時計の間から、庭の泉水が見える。泉水には大きな鯉がいた。その向うの蜜柑畑には、蜜柑だけでなく、種々の柑橘類が植えてある。葡萄の棚もある。時計の間からは、家の外も中も凡てが見える。父はそこで、唇を固く結んだ一種独特の表情をして坐っていた。ずっと後のことであるが、カナリヤだの鶯だの九官鳥だのの、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.